

## データ収集における方法論の検討

### 言語教育に寄与する発話データを集めるには？

伊藤 恵美子

#### 1. はじめに

言語研究の対象が小説や新聞などの活字(書き言葉)から、日常生活で使われている話し言葉へシフトするのに伴い、いかに分析対象のデータを収集するべきかという議論がますます盛んである。第二言語習得研究では学習者の発話データを収集する手段として、自然発話の観察、ロールプレイ、談話完成テスト(DCT: Discourse Completion Test)が主に用いられているので、ここではそれぞれの方法の特徴を概観する。

自然発話の観察は、実際に使われた話し言葉を分析の対象にする方法である。したがって、データの信頼性の高さが最大の長所として挙げられよう。ところが、その一方で、調査者が変数をコントロールすることは非常に難しく、調査対象者の個々の発話を調査者が事前に予想することもほとんど不可能である(Rintell and Mitchell, 1989: 250)。したがって、自然発話の観察でデータを収集する場合、調査を計画的に実施できないことが最大の短所である。

ロールプレイは、対話の目的に従い、対話者の役割を設定して、その役割に応じた進める対話練習と定義され、(1)示された規範文に従って対話をする場合、(2)規範文を参考にし、自由に応用して対話をする場合、(3)対話者の役割のみを設定して規範文を示さない場合、の3つの形式に分けられる(『応用言語学事典』2003: 53)。一般的に発話データの収集は(3)の形式で行われ、規範文の提示がなく対話が自由に発展していくのでオープンロールプレイと呼ばれている。『応用言語学事典』の説明から、調査者が調査対象者を選定して変数のコントロールが行えることと、分析対象とする発話行為が実現される場面を調査者が設定できることが、ロールプレイの特徴であると理解され、自然発話の観察と大きく違う利点でもあると言えよう。しかも、ロールプレイは音声言語でなされるので、調査対象者の話

伊藤恵美子

し方がそのままデータになることも有利な点である。しかし、調査対象者の話し方が現実の生活で本当に使われているかどうか、調査者に証明することはできない。

DCT は、中間言語語用論(interlanguage pragmatics)や発話行為(speech act)の分野でデータを集めるのに広く使われており、対話の状況が調査紙に印刷されていて、それぞれの状況で学習者が通常口にすることを書くように求める方法であると定義される(Gass and Selinker, 2001: 453)。典型的な DCT を以下に示す。

A friend invites you to dinner, but you really can't stand this friend's husband / wife.

Friend: How about coming over for dinner Sunday night? We're having a small dinner party.

You: \_\_\_\_\_

Friend: O.K., maybe another time.

(Beebe, Takahashi, and Uliss-Weltz, 1990: 71)

上記の例からわかるように、DCT は自由記述式のアンケートなので、一度に大量のデータが収集できること、変数のコントロールが効果的なこと、言語間や学習者と母語話者のストラテジーの比較に有効なことから、広く採用されている方法である。DCT の欠点としては、話し言葉を書かせる不自然さの他に、回答欄のスペースに応えの長さが制限されることや、使いなれた表現やフォーマルな形式が選ばれやすいことなどが指摘されている(Mey, 1993: 277)。しかしながら、比較文化語用論(cross-cultural pragmatics)の分野で先駆的な研究(CCSARP: Requests and Apologies: A Cross-Cultural Study of Speech Act Realization Patterns)を行った Blum-Kulka and Olshtain(1984)が DCT でデータを収集したことから、DCT は比較文化語用論や、比較文化語用論の流れを汲む中間言語語用論などで最も普及しているデータ収集の方法であり、事実上の主力方法であると言える(Gass and Selinker, 2001: 47)。

上述のように、比較文化語用論・中間言語語用論で採られているデータ収集の方法として、DCT は多くの支持を得ている事実があるが、DCT に対する異論がないわけではない。その典型的な主張は、DCT は調査紙による調査なので、集められたデータは自然な発話を反映していると言えるのか？という異議である。そこで、本稿は DCT をめぐる議論を検討し、問題点を整理して、それを克服するべく、データ収集の方法を提案していきたい。

## 2. DCTをめぐる見解

本章では、データ収集の方法をめぐって展開されている最近の研究を大きく「DCT 否定派」と「DCT 肯定派」に分けて、双方の論点を検討する。但し、前章で述べたように自然発話の観察は変数のコントロールができないため、当該分野ではほとんど用いられていないので、変数のコントロールが可能で調査が計画的に進められるロールプレイと DCT を検討の中心に据える。

### 2.1 DCT 否定派

DCT 否定派の最も鋭い舌鋒の一つは Rose(1994)である。Rose(1994)が、日本人とアメリカ人の依頼表現を DCT と選択式調査で比較した結果、日本人は 8 場面中 7 場面で DCT と選択式調査の回答が大きく異なった。この結果から、Rose(1994)は、DCT は特に日本人のデータ収集に不適切であると指摘しているのもので、その結論箇所を以下に引用する。

Until it is established that DCTs are a valid means of collecting data in non-Western contexts, we cannot assume that the Japanese DCT data is representative of face-to-face interaction.(Rose, 1994: 9-10)(DCT が西洋以外でもデータ収集の有効な手段であるとはっきりするまで、日本人の DCT のデータは面と向かったインタラク션을表しているとは言えない。筆者訳)

次に、Houck and Gass(1996)を紹介する。Houck and Gass(1996)は、直接的に DCT を否定しているのではないが、ロールプレイの有効性を主張する立場に立っているので、裏を返せば DCT を否定していることになる。Houck and Gass(1996)は、ロールプレイの事後処理の煩わしさと個人の言語行動がロールプレイにどの程度反映されるか疑問が残されていることを認めた上で、

Of the common data elicitation methods, open role-plays are the closest to what we might expect to reflect naturally occurring speech events.(Houck and Gass, 1996: 47)  
(よく知られているデータ収集の方法の中では、オープンロールプレイが自然に起こる発話行為を反映していると期待できるであろう方法に、最も近い。

伊藤恵美子

筆者訳)

と主張する。

## 2.2 DCT 肯定派

DCT 肯定派の代表は Rintell and Mitchell(1989)である。Rose(1994)のような過激な DCT 否定派の主張を除けば、DCT 否定派の見解は Houck and Gass (1996)に代表されるように、DCT は調査紙を使ってデータを収めるので収集したデータは書き言葉であり、これは自然な状態の発話から離れているので、話し言葉を集めるロールプレイのほうが、より実態に近いデータが得られるという主張である。この DCT 否定派の論調を受けて、DCT とロールプレイの双方でデータを収集し、両データに差がないことを示したのが Rintell and Mitchell(1989)である。

Rintell and Mitchell(1989)は、Blum-Kulka and Olshtain が1984年に行った CCSARP プロジェクトの調査紙からリジョインダー(rejoinder)を削除した DCT とロールプレイを、発話の長さの点で比較した。リジョインダーとは、調査対象者の回答をコントロールするために、調査者が回答欄の下に付ける台詞のことであり、第1章で紹介した Beebe, Takahashi, and Uliss-Weltz(1990: 71)の DCT では Friend の2回目の台詞がそれに該当する。調査紙にリジョインダーが付いていると、回答の長さがリジョインダーの直前までに限られるという物理的なスペースの問題だけでなく、回答がリジョインダーと整合性のとれる内容に限定され、調査対象者は自由な対話を作ることができない。これを解決するために、Rintell and Mitchell(1989)はリジョインダーを外したのであろう。

調査の結果、Rintell and Mitchell(1989)には、学習者は DCT よりロールプレイの発話のほうが長くなるが、ネイティブは両者のデータに顕著な差が認められなかったとある。学習者の発話が長くなった原因に、学習者がためらったり繰り返したりすることが挙げられており、それによりロールプレイでの発話が長くなると説明されている。つまり、Rintell and Mitchell(1989)は、DCT とロールプレイの手段の違い自体が結果に与える影響に大差がないと分析し、以下のように論じている。

In fact, the discourse completion test is, in a sense, a role-play like the oral one. With

both methods, subjects are asked to role-play what they or someone else might say in a given situation. So both methods elicit representations of spoken language.(Rintell and Mitchell, 1989: 270) (実際、談話完成テストはある意味で話し言葉のようなロールプレイである。どちらの方法でも、インフォーマントは与えられた状況で口にするであろうことをロールプレイするよう言われる。したがって、どちらの方法も話し言葉の表現を引き出している。筆者訳)

言い換えれば、回答者は調査者が設定した状況と対話者への応答に適した表現を求められるという調査の基本的なやり方において、ロールプレイと DCT は同じだというわけである。応答のチャンネル(channel:媒体)<sup>1</sup>が聴覚の音声の場合はロールプレイ、視覚の文字の場合は DCT になるので、両者の相違は媒体の違いだけという結論である。

DCT 肯定派の 2 本目としては Yamashita(1996)が挙げられる。Yamashita(1996)は 6 種類(自己評価・LLテスト・オープン DCT<sup>2</sup>・ロールプレイ・ロールプレイの自己評価・選択式 DCT)のデータ収集の方法を、統計的に比較検討した研究である。分析結果から、選択式 DCT では信頼性と有効性が確認できなかったが、他の 5 種類の収集方法では信頼性も有効性も確認できたと、以下のように報告している。

A total of six direct and indirect, and open-response and selected-response type tests were studied using the data of forty-seven North American English speaking learners of Japanese as a second or foreign language (JSL and JFL respectively). All of the six tests except for the multiple-choice discourse completion test (MCDCT) were found to be reasonably reliable and valid in one way or another.(Yamashita, 1996: 77) (直接と間接、自由回答と選択回答の合計 6 種類のテストが、JSL と JFL の北アメリカの英語話者 47 名に行われた。MCDCT を除くすべてのテストは、いずれにせよかなり信頼性があり有効であった。筆者訳)

<sup>1</sup> バーロ(1972)はコミュニケーション構造を SMCR(Source, Message, Channel, Receiver)モデルで説明している。

<sup>2</sup> DCT は自由記述式のアンケートなので、一般的には自由回答と看做されているが、Yamashita(1996)は、調査方法を自由回答と選択回答に分けて、その妥当性と有効性を確かめることを目的にしているため、DCT もオープン DCT(open discourse completion test)と選択式 DCT(multiple-choice discourse completion test)に区別して、各々を分析している(Yamashita, 1996: 11)。

伊藤恵美子

つまり、Yamashita(1996)から、選択式ではない DCT はデータの信頼性が高く、発話の収集手段として有効であることが科学的に示された。

DCT 肯定派の3本目として Beebe and Cummings(1996)を紹介する。Beebe and Cummings(1996)は自然発話の観察と DCT を比較して、断り行為の典型的な例は DCTから採れると、<sup>3</sup> 下記のように結論づけている。

To date, however, many studies of natural speech have not given us scientifically collected speech samples that represent the speech of any identifiable group of speakers. They do not give us situational control, despite the fact that situation is known to be one of the most influential variables in speech act performance. Discourse Completion Test data do not have the repetitions, the number of turns, the length of responses, the emotional depth, or other features of natural speech, but they do seem to give us a good idea of the stereotypical shape of the speech act – at least in this case of refusals. (Beebe and Cummings, 1996: 80-81) (しかしながら、現在までのところ、自然発話研究の多くは、話し手のグループと同一のものと証明し得る発話を代表する標本を科学的に収集していない。発話行為において状況が最も影響を与える一要因であることが事実として知られているにもかかわらず、自然発話研究は状況のコントロールができない。DCT のデータからは、繰り返し、ターン数、応答の長さ、感情の深さや他の自然発話で見られる特徴は取り出せないが、発話行為の典型的な例が少なくとも断り行為においては得られるようである。  
筆者訳)

### 2.3 議論

本節では、第1節で取り上げた DCT 否定派と第2節で取り上げた DCT 肯定派の論点をまとめる。

第1節で紹介した Rose(1994)の日本人の DCT データへの不信に対して反論を出している Kawamura and Sato(1996)の考えを示す。

However, his study was limited in the scope of speech acts and subjects. Furthermore,

---

<sup>3</sup> 本稿は博士論文の一部を再分析したものであり、博士論文は断り行為のパラダイムを交換して、勧誘・依頼行為に対する返答と捉えて調査・分析を行った。

DCT procedure was suitable for this study in that it would allow us to find the range of expressions that the subjects are likely to use. What the subjects think they would say seems more reliable than what they select from the limited number of options they might not use.(Kawamura and Sato, 1996: 70)(しかしながら、Roseの研究は発話行為とインフォーマントの範囲が限られていた。さらに言えば、DCT という手段はインフォーマントが使うであろう、表現の幅をみつけるこの種の研究に適していた。インフォーマントが使わないかもしれない、限られた選択肢の中から選ぶより、インフォーマントがどう言うかを考えることのほうが信頼できる。筆者訳)

確かに、調査対象者が実際に使うかどうかかわからない表現を選択肢の中から選ぶ選択式より、個々の調査対象者が提示された状況でどう言うかを考えることのほうが信頼できる。また、Kawamura and Sato(1996)が指摘しているように、そもそも発話行為と調査対象者の範囲が限られていたというなら、Rose(1994)の結論自体が揺らぐ。よって、Rose(1994)より Kawamura and Sato(1996)の主張、つまり選択式調査より自由記述式の DCT のほうが調査対象者の発話を引き出すことができるという主張のほうが妥当性は高いと考えられる。<sup>4</sup>

以上の議論から、DCT が発話データの収集において有効な手段であると言えるが、依然として、DCT には自由な対話、つまりオープンロールプレイができるのか？が課題として残されている。

Houck and Gass(1996)のオープンロールプレイがデータ収集の最良手段であるという主張について検討を加えたい。DCT は調査紙調査なので、回答欄を十分に広く空けておいても、調査対象者の回答に対して相手が発言することもなければ、相手の発言に対して調査対象者が再び意見を言う(書く)こともない。調査対象者は一人であれこれ考えて、相手の台詞に合うような回答を「1回」書くだけである。つまり、DCT では相手とのやりとり、インターアクション(interaction)<sup>5</sup>の出現を収集することができない。

<sup>4</sup> Rose(1994)は日本人が回答した DCT に対して懐疑的であるが、人という下位概念である属性の検討の前に、上位概念でより一般性が高い方法論の検討が先立って行われて然るべきであろう。

<sup>5</sup> 英語教育では「インタラクション」、日本語教育では「インターアクション」と表記することが多いようである。

伊藤恵美子

では、ロールプレイを行えば、そのロールプレイはオープンロールプレイになるだろうか。机上の議論に留まらず、ロールプレイを実際に調査して確認することが重要である。そこで、次章でロールプレイの結果からインターアクションの出現と、ロールプレイの有効性を検討する。

### 3. ロールプレイ

#### 3.1 概要

##### (1)学習者

大学セミナーハウスで、来日後の研修を受けているマレーシア政府派遣留学生に対して、筆者(X)がロールプレイを行った。留学生は日本の大学(学部)に進学することが決定しており、日本語を含む2年間の予備教育をマレーシアで受けてから来日した。以下はロールプレイの概要である。

- [1] 日時：1999年3月31日12：30～13：30
- [2] 場所：大学セミナーハウス内ラウンジ(東京都)
- [3] 対象：マレーシア政府派遣留学生7名(女性A・Bの2名、男性C～Gの5名)
- [4] 専攻：電気工学、情報工学、機械システム論、制御システム論
- [5] 年齢：19～20歳
- [6] 日本語学習期間：2年
- [7] 日本語レベル：中級程度
- [8] 母語：マレー語
- [9] 使用言語：日本語
- [10] 発話行為：勧誘に対する断り行為

##### (2)日本語母語話者

日本語母語話者に対するロールプレイは、20歳代の日本人の大学院学生を対象として、学習者に対するロールプレイと同様の手続きで筆者(X)が実施した。以下は、ロールプレイの概要である。



- [1] 時期：1999年4月中旬～5月上旬
- [2] 場所：某大学大学院学生研究室(愛知県)
- [3] 対象：大学院学生5名(男性H、女性I～Lの4名)
- [4] 専攻：異文化コミュニケーション、社会言語学
- [5] 年齢：23～29歳
- [6] 母語：日本語
- [7] 使用言語：日本語
- [8] 発話行為：勧誘に対する断り行為

### 3.2 実施方法

ロールプレイで設定した話し手と聞き手の関係は、英語学習者を対象に行われていた発話行為研究を日本語学習者に採り入れた藤森(1994)に倣った。「地位」は「目上」「同等」の2水準、「親疎関係」は「親」「疎」「心理的好感度」の3水準として6場面を設定した。場面設定は表1のとおりである。

表1 場面設定

場面	対話の相手	状況
1	親友	サッカー/テニスに誘われる
2	嫌いな友達	映画に誘われる
3	まだ親しくない友達	ドライブに誘われる
4	好きな先生	食事に誘われる
5	嫌いな先生	カラオケに誘われる
6	あまりよく知らない先生	パーティに誘われる

実施方法としては、調査対象者に場面を設定したカードを渡し、調査対象者が場面状況を把握したことを確認してから、筆者と1対1でロールプレイを行った。その後、フォローアップ・インタビューを実施した。ロールプレイとフォローアップ・インタビューの内容は、テープに録音した。

なお、発話データの文字化は尾崎(2004)に従い、ひらがなとカタカタと数字だけを使って、呼吸段落ごとに一文字分空けて、句読点は打たない。発話データの文字化で使用した記号は尾崎(2001; 2004)で用いられている記号であり、次にその意

伊藤恵美子

味を示す。

【発話データの文字化で使用した記号】

- # : 「沈黙があるな」と感じるくらいの長さ
- # # # : 「気まずい沈黙」と感じるくらいの長さ
- + : 上昇イントネーション
- < : 発話の重なりの始め
- > : 発話の重なりの終わり
- : 母音の引き伸ばし
- ( ) 内の発話 : 聞き手の発話

### 3.3 結果と考察

6 場面で行ったロールプレイの実例として、(1)学習者に対して行ったロールプレイ《場面 1》と(2)日本語母語話者に対して行ったロールプレイの《場面 1》の対話を文字化して、以下に示す。同じ《場面 1》の対話の文字化により、ロールプレイにおける学習者と日本語母語話者、双方の特徴を見出すとともに、ロールプレイで出現するインターアクションの割合を確かめる。

#### (1) 学習者

《場面 1》「親友にサッカー(テニス)をしようと言われました。明日は試験です。」

a1X : テニス しない+

a2A : ごめんね したいですが # しけんがあるから がんばらなきゃ

b1X : テニス しない+

b2B : ジャ いこうか+

b3X : しけんは+

b4B : わたしは しけんのまえ べんきょうしない

c1X : サッカー しない+

c2C : # うーん あしたは しけんがあるよ # うーん サッカーは また しけんのあと

d1X: サッカー しない+

d2D: ざんねんだねー あしたは しけんがあるから

e1X: サッカー しない+

e2E: すみません

f1X: サッカー しない+

f2F: すみません あしたは しけんですからー

g1X: サッカー しない+

g2G: # # #

## (2)日本語母語話者

《場面1》「親友にサッカー(テニス)をしようと言われました。明日は試験です。」

h1X: テニス しない+

h2H: # あー あした しけんがあるから # ちょっと テニスは もうしわけ  
ないけど また こんど さそって

i1X: テニス しない+

i2I: テニスを したいんだけど # あしたは しけんなので # ちょっと べん  
きょうしなきやいけないんで またに しましょう

j1X: テニス しない+

j2J: えー あした しけんなんだよね またに しょうよ

k1X: テニス しない+

k2K: あした しけん だって だめ だって

l1X: テニス しない+

l2L: いいねー テニス いきたい いきたい # どこ+

l3X: そこの がっこうの テニス

l4L: いいね # だけど あした しけんだよ わたし

伊藤恵美子

15X： あ そうだった+

16L： ぜんぜん やってないから きょうは ちょっと ペンきょうしないと #あ  
しただったら いいんだ<けど

17X： うん> じゃ またに しょう<か

18L： ごめん>ね

次の表は、上記のような具体例に示される対話で起こったインターアクションの回数をまとめたものであり、表2は学習者に対して行ったロールプレイの結果、表3は母語話者に対して行ったロールプレイの結果である。

表2 インターアクションの回数：学習者

場面	A	B	C	D	E	F	G	平均
1	1	3	1	1	1	1	1	1.3
2	1	1	1	1	1	1	1	1.0
3	1	1	1	1	1	1	1	1.0
4	1	1	1	1	1	1	3	1.3
5	1	1	1	1	1	3	1	1.3
6	1	1	1	1	1	1	1	1.0

表3 インターアクションの回数：日本語母語話者

場面	H	I	J	K	L	平均
1	1	1	1	1	7	2.2
2	1	1	1	1	8	2.4
3	1	1	1	1	4	1.6
4	1	1	1	1	14	3.6
5	1	1	1	1	5	1.8
6	1	5	1	1	9	3.4

表2から、学習者とのロールプレイでは、《場面1》のBさん、《場面4》のGさん、《場面5》のFさんの、のべ3名にインターアクションが起こったことがわ

かる。B さん・F さん・G さんに起こったインターアクションは、B さんの例( b1X b2B b3X b4B)で示されているように、ともに3回(調査者 学習者 調査者 学習者)であった。

表3から、日本語母語話者とのロールプレイでは、《場面6》のIさん、全6場面のLさんの、のべ7名にインターアクションが起こったことがわかる。日本語母語話者のIさんのインターアクションは5回、Lさんのインターアクションは《場面1》から《場面6》にかけて7回・8回・4回・14回・5回・9回であった。

表2および表3には表示されていないが、ロールプレイで出現したインターアクションの全場面における平均回数は、学習者では1.14回、日本語母語話者では2.50回であった。

筆者と調査対象者との関係は、学習者は調査当日が初対面であったが、日本語母語話者とは以前から面識があったので調査を依頼した。しかるに、顔見知りの日本語母語話者でさえIさんとLさん以外に、インターアクションは起こらなかった。インターアクションが連続した唯一の例外は英語教師の経験者Lさんで、職業上ロールプレイの方法に慣れているからか、筆者の意図が理解されやすかったようである。Lさん以外の調査対象者は、Bさんの例からわかるように、筆者が調査対象者に行った質問( b3X)に対して、調査対象者が応えること( b4B)はあったが、自ら筆者と交渉(negotiation)<sup>6</sup>しようとして発話することはなかった。

本章の目的は、ロールプレイがインターアクションを採るのに有効な調査方法であるか否かを確認することであった。上で述べたように、調査対象者と筆者との間でやりとりが何回も続かなかった、厳密に言えばLさん以外はオープンロールプレイにならなかった事実を踏まえると、ロールプレイが有効な方法であると一概には言えないのではないだろうか。<sup>7</sup> 調査者と面識のある調査対象者でも録音

<sup>6</sup> 会話で対等の立場をできる限り維持するために、会話の当事者が取る行動のことを指す(Gass and Selinker, 2001: 272)。

<sup>7</sup> 国際言語文化研究科の奥田智樹助教授から、「『英語教師の経験がある1人』というのはおそらくLさんだと思いますが、私は他の4人の答え方よりも、むしろLさんの答え方の方に、多少無理に引っ張っているような不自然さを感じます。伊藤さんはロールプレイにおいてオープンロールプレイに移行することが望ましいと考えておられるようですが、それはこの場合それほど重要なことなのでしょうか。」というコメントが、国際開発研究科の木下徹教授からは、「自然な対話場面でもアジア文化では目下の者は主として質問されたら答えるのであり、逆に目上に質問を返すというのは文化的にタブーとまでは言えないにしても、あまり頻繁ではないかもしれない。」との論評が出された。

伊藤恵美子

マイクを前にすると緊張してオープンロールプレイでデータを集めるのは易しくなかったのも、ラポール(rapport: 信頼関係)が確立されていない初対面の学習者にロールプレイを実施してもオープンロールプレイに移行するのは不可能に近いだろう、というのが筆者の偽らざる実感である。

#### 4. 結論

本稿は、第1章で発話データの主な3つの収集方法、自然発話の観察・ロールプレイ・DCTの特徴を概観した後、第2章でDCTをめぐって議論し、第3章でロールプレイ中のインターアクションの出現率を調査した。この一連の検討の結果、学習者の発話データの収集方法としては、リジョインダーを廃したDCTが最も現実的な妥当性が高いと結論づけられる。

但し、この結論は、外国でのデータ収集を伴う比較文化語用論や中間言語語用論の分野において、量的分析を施すために十分なデータを収集することと、調査者が学習者の指導者の場合に調査対象者である学習者に影響を与えるという「ハイゼンベルク効果(Heisenberg effect)」<sup>8</sup>を考慮に入れて、調査者が担当する学習者からデータを集めないことを前提にした結論であることを断っておく。前提を条件としない研究においては、データ収集の最良手段は別の方法になるだろう。

つまり、本稿では筆者が調査対象者に対して直接ロールプレイを行う範囲に調査を限定しているが、量的分析に必要なデータを確保するために全国規模で調査を行うとしたら、ロールプレイは現実的な手段でないこと、調査を外国にまで広げて行おうとすれば、調査協力者にロールプレイを依頼することになり、それは調査協力者にかかる負担が大きだけでなくデータの均質性を確保することも難題であり、収集したデータの信頼性が低くなることが十分予想されることも、実証研究を進めていく上で考慮されなければならない。

その上で、DCTで測定できない側面を補うために、可能な範囲でロールプレイを実施したり、フォローアップ・インタビューを行ったりすることは不可欠であろう。

すなわち、研究手法にデータ分析を採用するなら、量的分析と質的分析、両分析

---

<sup>8</sup> この用語は量子力学に由来し、「不確定性原理(principle of indeterminacy)」に関連している。

の長所が十分活かせる調査計画を立てなければならないし、また両分析が補い合うような複数の種類のデータが求められましょう。量的分析と質的分析は、例えば車の両輪であり、どちらが欠けても順調な走行は望めない。

最後に、複数の手段で収集した複数のデータを分析して初めて発話行為の全体像が浮かび上がる、と主張している Cohen(1996)を紹介しておきたい。

In the field of language assessment, there is a current emphasis on the multimethod approach. The consensus is that any one method would not assess the entirety of the behavior in question.(Cohen, 1996: 390)(言語研究の分野では、マルチメソッドの方法が現在重要視されている。どの方法であっても一種類の方法では研究課題となっている行動の包括的な研究はできないだろうというところに意見は一致する。筆者訳)

付記： 本稿は、名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻に提出した博士論文「マレー語母語話者のポライトネスの諸相：勧誘・依頼行為に対する返答を中心に滞日期間の観点から」の一部分を基に、新たに考察して加筆修正を大幅に行ったものである。

## 参考文献

- 伊藤恵美子(2004) 「マレー語母語話者のポライトネスの諸相：勧誘・依頼行為に対する返答を中心に滞日期間の観点から」名古屋大学大学院国際開発研究科国際コミュニケーション専攻博士論文(未公刊)
- 尾崎明人(2001) 「接触場面における在日ブラジル人の『聞き返し』とその回避方略」『社会言語科学』4-1, 81-90. 社会言語科学会
- 尾崎明人(2004) 「発話データの文字化について」2004年度日本語談話分析論配布資料
- 小池生夫(編)(2003)『応用言語学事典』研究社
- バーロ D. K.(1972)布留武郎・阿久津善弘(訳)『コミュニケーション・プロセス』

伊藤恵美子

協同出版

(Berlo, D. K. 1960 *The Process of Communication: An Introduction to Theory and Practice*. New York: Holt, Rinehart and Winston)

藤森弘子(1994) 「日本語学習者に見られるプラグマティック・トランスファ－：『断り』行為の場合」『名古屋学院大学日本語学・日本語教育論集』1, 1-19. 名古屋学院大学留学生別科

Beebe, L. M., and Cummings, M. C.(1996) Natural speech act data versus written questionnaire data: How data collection method affects speech act performance. In S. M. Gass, and J. Neu (Eds.), *Speech Acts across Cultures*, 65-86. New York: Mouton de Gruyter.

Beebe, L. M., Takahashi, T., and Uliss-Weltz, R.(1990) Pragmatic transfer in ESL refusals. In R. C. Scarcella, E. S. Andersen, and S. D. Krashen (Eds.), *Developing Communicative Competence in a Second Language*, 55-73. Rowley, MA: Newbury House.

Blum-Kulka, S., and Olshtain, E.(1984) Requests and apologies: A cross-cultural study of speech act realization patterns (CCSARP). *Applied Linguistics*, 5, 196-213.

Cohen, A. D.(1996) Speech acts. In S. L. McKay, and N. H. Hornberger (Eds.), *Sociolinguistics and Language Teaching*, 383-420. Cambridge: Cambridge University Press.

Gass, S. M. and Selinker, L. (2001) *Second Language Acquisition: An Introductory Course* (2nd ed.). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.

Houck, N., and Gass, S. M.(1996) Non-native refusals: A methodological perspective. In S. M. Gass, and J. Neu (Eds.), *Speech Acts across Cultures*, 45-64. New York: Mouton de Gruyter.

Kawamura, Y., and Sato K.(1996) The acquisition of request realization in EFL learners. *JACET Bulletin*, 27, 69-86.

Mey, J. L.(1993) *Pragmatics : An Introduction*. Oxford, UK: Blackwell.

Rintell, E. M., and Mitchell C. J.(1989) Studying requests and apologies: An inquiry into method. In S. Blum-Kulka, J. House, and G. Kasper (Eds.), *Cross-Cultural Pragmatics: Request and Apologies*, 248-272. Norwood,



NJ: Ablex.

Rose, K. R.(1994)On the validity of discourse completion tests in non-Western contexts.

*Applied Linguistics*, 15, 1-14.

Yamashita, S. O.(1996)*Six Measures of JSL Pragmatics*. Honolulu: Second Language Teaching and Curriculum Center, University of Hawaii at Manoa.

